

<紹介・インタビュー>

ハリウッド女優・高美衣子に聞く  
— 『サヨナラ』(1957年)に主演して —

**An Interview with Hollywood Actress Miiko Taka on  
Starring in Sayonara (1957)**

インタビュー・構成：志村 三代子 名嘉山 リサ

SHIMURA Miyoko, NAKAYAMA Risa



本インタビューの目的は、1957年に公開された『サヨナラ』（ジョシュア・ローガン監督）に主演した日系人俳優・高美衣子氏に、『サヨナラ』撮影当時の思い出と、1950年代後半から1960年代のハリウッド映画界におけるアジア系俳優の状況をうかがうことである。

高美衣子氏は、1925年に米国シアトルで生まれ、ロサンゼルスで育った日系二世である。1956年に『サヨナラ』の主役・ハナオギに抜擢され、ハリウッド映画界にデビュー、本作の演技は当時高く評価された。その後、『戦場よ永遠に』（1960年、フィル・カールソン監督）、『歩け走るな！』（1966年、チャールズ・ウォルターズ監督）、『将軍』（テレビ映画、ジェリー・ロンドン監督）などに出演する。

映画『サヨナラ』は、1953年にアメリカで出版されベストセラーとなったジェームズ・ミッチェナーの自伝的小説の映画化である。ミッチェナーは、1947年に刊行された『南

『太平洋物語』でピューリッツァー賞を受賞した人気作家であり、この作品は1949年に舞台化され、1958年に映画化された際には『サヨナラ』で監督を務めたジョシュア・ローガンが再び演出を担当した。『サヨナラ』は、朝鮮戦争で活躍した空軍のグルーパー少佐(マーロン・ブランド)と、松林歌劇団(宝塚歌劇団がモデルとされる)の男役トップスター・ハナオギの恋愛模様を描いた物語である。『サヨナラ』の公開当時のアメリカは、人種差別が激しく、異人種間の恋愛・結婚は偏見に晒された。現にミッチェナーの原作では、グルーパーとハナオギは、別離を余儀なくされるが、映画版では、グルーパーは周囲の反対を押し切ってハナオギを説得し、彼女もそれに応える。異人種間恋愛の結末がハッピーエンドを迎えた映画作品は『サヨナラ』がはじめてではないが、本作以前の作品の多くが、ハリウッドの偏見と誤解にみちた日本描写で日本人観客の反感を買ったのに対し、『サヨナラ』は、日米両国から賞賛された点で日米関係を描いた作品の分水嶺に位置づけられる。ハナオギの友人カツミを演じたミヨシ・梅木とグルーパーの部下・ケリー役のレッド・バトンズが共に1957年度のアカデミー助演賞を受賞した。

高氏へのインタビューは2015年3月28日、高氏の住むラスベガスで行われた。

—私たちは、日米関係を描いた映画を研究しておりまして、毎年、大学の授業で『サヨナラ』を見せています。

高氏 毎年? こんなのを学生に見せるのは、かわいそうです(笑)。

—いえいえ。毎年、学生から高さんがとてもきれいという感想が寄せられています。私にとっても、高さんといえば、『サヨナラ』のハナオギさんなんです。

高氏 『サヨナラ』になぜ興味を持ったのですか?

—この映画は、日本のことを描いているので、日本人として興味を持ちました。それに高さんがご出演なさっています。ハリウッドで日系の女優さんは珍しいと思いました。

高氏 私にとって、なぜこの映画を選択したのか、その理由が大事です。私は女優になりたいとか、そんなことは全然考えていませんでした。

—今、女優にはなりたいたと思ったことはなかったとおっしゃいましたが、そう考えながら女優になられた経緯は、どのようなものだったのでしょうか?

高氏 そうそう。全然そんなことは考えていませんでした。先日、学校を卒業した時の写真や本を見ていたら、あるお友達からのメッセージに、「あなたはハリウッドに行ったほうがいい」と書いてあったのを見つけました。当時の私は、そんなことを考えたこともなかったから、本当にそういうことになったなと思ってびっくりしました。私には、2人の兄がいますが、幼少時はよく兄たちにいじめられていて、そのことばかりが頭にありました。兄たちとの激しいけんかのことや、美しいママのことを考えていて、ママのことを褒められるととても嬉しかったですし、自分のことはそれこそ全然考えていなかったのです。Teenagerの頃は、戦争の後だったこともあって、日本人とアメリカ人がもっと仲良くしたらいいのに、どうにかしたいなど、いろんな思いや考えを学校のお友達と話していました。それで、『サヨナラ』という映画製作のために、日本人の女優を探していることを知ったお友達が、「美以子、あなた、いつも日本とアメリカが仲良くなるようにどうにかしたいと言っているでしょう。あなたはこの映画に出るといいのに」と背中を押してくれたのが、この映画の撮影に参加した理由だったのです。当時の私は、映画のことをま

るで何も知りませんでした。初めてオーディションを受けるために事務所に行った時、これを読んでください“Please read this for us”と、手渡された台本に書いてある「今日はいいお天気ね」という文をそのまま読み上げてしまいました。学校でも reading と言いますし、普通に読めますね。でもそれではだめで、reading は書いてあることをセリフとしてちゃんと口にするという意味で、私はそのことを知らなかったのです。12月26日からの撮影のために、方々を回って人材を探していたらしいのですが、私がオーディションを受けたのは12月6日で、もう最後でした。本当は、山口淑子さんが主演することになっていたらしくと後になって噂で聞きましたが、結局私が最後の最後だったようです。

——山口淑子さんが出演されなくなった理由は、ご存じですか？

高氏 私が入ったからでしょうか。詳細は知りませんが、何か事情があったのでしょうか。彼女のことも、噂だけを聞きましたが、本当に何も知らなかった。私は、女優になりたいと考えたこともなく、映画のことや、その中の関係を全然知らなかった。当時の俳優さんもまったく知らなかったのです。なぜかと言えば、ママは厳しく私たちを育てたので、映画に連れて行ってもらうようなことはありませんでした。時代が変わっても昔のママだったのです。ただ、私の両親はハリウッドでお野菜や果物のマーケットの仕事をしていました。Sunset Boulevardにお店があり、いつも俳優さんたちが行ったり来たりしていました。でも、それだけです。

——『サヨナラ』は、アメリカでベストセラーになったオリジナルストーリーがありますね。原作者のジェームズ・ミッチェナーは撮影現場に遊びに来られましたか？

高氏 1度だけ来ました。

——お話しなされたことは？

高氏 ありません。

——原作の小説を読んでどう思われましたか？

高氏 面白い、いい小説だと思いましたよ。私はお友達に日本とアメリカのことをいつも話していましたから、みんながこれを読みなさいと勧めてくれました。それで初めて、夏に読んでみました。

——では、原作の小説を読まれた後にオーディションを受けられたのですか？

高氏 そうです。小説を読んだのは夏ですが、その頃から女優を探していたかどうかは知りません。

——撮影は、一ヶ月くらいだったのですか？

高氏 いえ、もっと長かったですよ。3月か4月までです。

——その間、ずっと日本にいらっしゃったのでしょうか？

高氏 日本にいたのは、1月と2月。3月まではいなかったと思います。

——相手役のマーロン・ブランドさんはどんな方でしたか？ 優しかったですか？

高氏 彼はすごく優しく、very 気がつく人です。大阪に行った時には、食事を運んでいたウェイトレスが、滑って食事を落としてしまい、大声で泣きながら走っていくのを見て、「すごくかわいそうだ。別に何でもないので、泣かなくてもいいのに」と言ったんです。彼は sensitive で、いろんなことに目配りのできる人でした。

——撮影で一緒に演技をされた時も、マーロン・ブランドさんのアドバイスなどがあったのですか？

高氏 もちろん。「美以子、こちらに向きなさい」と私に。私は何も知らなかったから、きちんと教えてくださいました。普通だったら、そんなふうには言ってもらえない。自分のことばかりで、ほかの人を目立たせるようなことはしないです。例えば、ある俳優さん。本当に彼は自分のことばかり。

—どなたでしょうか？

高氏 言わない(笑)。でも映画界の人たちはだいたいそうですよ。自分のことばかり引き立つように行動していた。でも、ブランドはそんな人ではありません。何と言うかな、He has many personalities. でも、彼も、やっぱり悲しい事が色々あった人です。お母さまがのんべえだったでしょう。お父さまもまた変わった人だったし。子どもの頃から苦労をしたんでしょうね。だから、いろんなことに気づいて心配りができるのでしょうか。But he was a very good man, very very good man. ご立派な方でした。それに、彼はおちゃめでした。

—それは具体的にはどのようなことでしょうか？

高氏 He always liked to joke around. いろいろ遊ぶのが好きなの。人を冷やかしたり、意地悪じゃなくて、すごくかわいい。He was a very special human being, very special. でも very private, private な人でもありました。このような仕事には、意地悪な人がたくさん寄ってくるでしょう。例えば、私にいつも電話をかけてくる新聞記者の人たち。彼のことを知りたくて、私に何度も電話をかけてきましたが、私は一切彼のことをしゃべらない。お付き合いをしているときでも、一切彼のことを絶対に話しません。

—お付き合いというのは？

高氏 映画を撮影する時には、他の方ともお付き合いがあるでしょう。みんな私に彼のことを尋ねるけど、私は一切しゃべらないし、彼にもそうしたことを報告しませんでした。だから、彼は私を信用したのだと思います。

—『サヨナラ』で共演なさった後も、お付き合いは続いていたのですか？

高氏 そう。お付き合いといっても、彼は私に全然手を出さなかったんです。日本で撮影する時は京都のホテル住まいでしたが、最初の夜、私は興奮して寝られなかったんです。彼はそれを知っていて、結局2人で夜中の2時までしゃべっていました。それでも眠れない私に、寝られるようにとお薬を持ってきてくれたり、彼は優しかった。私の部屋から彼の部屋が見えていたんです。でも、彼とは絶対に、Don't fall in love with him. 彼とお付き合いをして、わあって惚れなさんなど、私もすっかり自分に言いきかせました。なぜそう言い聞かせたのかというと、そうやってしまえば後で苦労するのは私の方だということを知っていたから。だから、お友達としてのお付き合いでした。彼もそれで安心したのでしょうか。私は誰にも彼のことを言わないし、彼をどこかに連れて行って紹介しますとか、そんなことはしたくありませんでした。彼の性格をよくわかっていましたから。人生ってそういうことじゃないですか？

—すてきなお話ですね。『サヨナラ』に出演をされた時に talent agency には入られたのですか？

高氏 いえ、私は偶然にも brother-in-law がエージェントをしていたんです。先ほどお話ししたように周囲の友達のすすめもあって、行って見たのです。それがオーディションの最後の時です。



——ハナオギは、舞台上で歌や踊りをしますが、そういったご経験は全くなかったのでしょうか？

高氏 ありません。大阪での撮影では、ステージで踊るところがあったんですね。私はそんなことをしたことがなかったので、なんていうかな、男性用の下着を染めて、それを私にはかせて、それがすごくタイトで、私はハイヒールをはいて階段を下りるの。階段をハイヒールで下りるなんて、わあっと思ってね。それで、最後のステップを私は1つ、I skipped it. I almost fell down.それで監督に怒られてね、What did you do? You spoiled the whole shot! って。私はI could kill myselfと思ったけど。いろいろ面白いことができましたよ。

——『サヨナラ』の監督のジョシュア・ローガンは、元々、舞台の監督だったからあのような演出をなさったのかなと思っていました。

高氏 彼は映画の演出をしたことがなかったので、舞台のような演出が先にありました。——どんな監督さんでしたか？

高氏 彼はとても優しい人でした。でも、映画の監督をしたことがなかったから、あまり自分に自信がなかったんですよ。でも、どうにか、こうにか。でもそんな風だからブランドがいつも彼を冷やかしたりして、いじめていたこともありました。だから、セットの中で2人がけんかをする、ブランドは方々ぐるぐる走り回っていたんですよ。

——ジョシュア・ローガン監督の演出で、印象的だったエピソードはございますか？

高氏 ただ、彼が言うことを「はいはい」と聞いて、なるべくできることをしていました。私は映画のことを知らないし初めてだったから、色々な失敗もあったと思います。私は何も知らなかったから、もう少ししっかりしたらよかったと思います。それこそ、遊び半分みたいにしてたのよ。お昼の食事を食べに出て帰ってこなくて、監督に怒られたことがあります。だから、後から見てもよくやったなと思いました。

——とても演技が自然ですよ。初めてとは全く思えないです。

高氏 そう？ でも、私は無知だし、言われた通りにやって、偶然にそんなふうになったと思うんです。最初のテストで、みんながびっくりしたんですから。私はジェームズ・ガーナーさんとテストをしたのですが、彼をご存知？ 彼はTVによく出たけど、そういうことを誰にも言わずに、映画のスターになりたいと言って、一所懸命、スタジオにいつも行っていたんですよ。私は、おしゃべりが上手だったので、『サヨナラ』の宣伝のために方々

に出向きました。ヨーロッパにも宣伝に行ったんですよ。スコットランドからイギリス、イギリスからフランス、そしてドイツ、スペインなどに行きました。行った先の人々はみんな、私の外見が日本人ですから、私のことを日本から来たお嬢さまだと、そんな感覚があったようですね、それがわかっているの、私は Yes, I was born in Seattle, Washington. と言えませんでした。だから、Oh, yes, I was born in 「シアトル」と日本の発音で言いました。そうするとシアトル生まれとわからないでしょう。I was born in Seattle. と言ったら、外人はこんがらがります。だから、日本の発音でシアトルと言ったら、I see. と言って、質問されなくなりますから大丈夫なんです。私の success は、私が落ち着いていたからでしょうね。パッパ、パッパ答えるの。でも、それは面白かったわよ。

——それはとても貴重なご経験ですね。お一人で行かれたのですか？ マーロン・ブランドさんがご一緒ではなかったのですか？

高氏 彼は大スターだもの。絶対行かないですよ。

——家では、英語と日本語の両方で会話なさっていたのですか？

高氏 そうです。でも、小さい頃は日本語を使うようにずっとママから言われていました。ママは、絶対に日本語が話せなくちゃだめだと言うの。でも、私たちは熊本なのに、熊本弁は全然使わせないんです。ただもう、標準語。だから、私はときどき冷やかして熊本弁をしゃべります。私もおちゃめだったのよ (笑)。

——では、『サヨナラ』の撮影のときに、初めて日本に行かれたのですか？

高氏 撮影の1年前に初めて行ったんですよ。ママが、日本の方がアメリカに来た時、「一所懸命仕事をして、お金を貯めたら日本へ帰る」と約束していたんです。ママもそういうつもりで、日本の方には「こちらで日本語を教えています」と言っていて、帰るつもりでいたと思います。その翌年に『サヨナラ』のことがあったから再び日本へ行って、ここが日本かなあと思いました。It was so inspiring for me. 全部もう I couldn't believe the sensitivity Japanese people had. たとえばお風呂。旅館へお風呂に入りに行ったんですよ。それで、小さい窓を開けたら、外に小さいお庭がちゃんとある。それを見たときびっくりしました。日本の sensitivity がものすごく。

——当時の日本はまだ貧しかったと思いますが、あまり感じられなかったのですか？

高氏 いいえ。ただ、アメリカと日本では全然違いました。アメリカはいろんなものが大きくて、小さいことには構わないんです。日本は sensitive. ブランドはやっぱ sensitive だったんですよ。だから、He loved Japan. 彼の日本のお宅には、日本のものがたくさんありました。

——撮影は神戸で行われたのでしょうか？

高氏 いいえ。神戸ではなく、大阪と京都でした。

——ミヨシ・梅木さんとも共演されていますよね。

高氏 彼女は私の部屋のお隣でした。あまり、他の人とお付き合いすることがなくて、すごく寂しい人でした。私と性格が違いますよ。全然 opposite. でも人前に出ると、その相手によって彼女の性格は変わったの。personality が変わるんです。彼女はすごくお付き合い上手だったけども、相手次第というか、その人によってです。彼女はだから She had that kind of personality. She was not a happy person.

—梅木さんは、この作品で、相手役のレッド・バトンズさんとお二人でアカデミー助演賞を取られましたね。インターネットの批評では、梅木さんより、高さんの評価の方が高いです。梅木さんは脇役ですから。梅木さんが演じたカツミは夫のケリーと心中してしまう役でしたね。

高氏 小さい役でも、やっぱりオスカーもらったんですもの。彼女はやはり日本で、歌で成功しましたもの。ナンシー梅木ってね。でも She had lots of complex.

—梅木さんは、あまり美人じゃないということが、コンプレックスだったのでしょうか？

高氏 いえ、自信はあったけど、他にいろいろあったのでしょうか。She could never go above it. 我々はみんな、時によっていろいろあるけれど、それを She couldn't rise above it. 何て言うの？ 乗り越えられない？ 彼女はそれができないんですよ。いつもみじめなことばかり考えて、それっきり。私ならそういう時はやっぱり、You have to learn by it. それを追い越さなくちゃと思います。それは一つの経験で、それを価値にしないでいいんじゃない。Is that the word? I don't know how to express it, but みんなその時々でいろいろあるんだから、それを何もしないままにしているもしようがないのよ。それはやっぱりいいように捉えて、利用したらいいと私は思っています。She was always very sad. 残念ですよ。後に、彼女のお兄さまが自殺したとかありましたね。いろいろあったから、それでそんなふうになったんでしょうね。その後1度アメリカに来ていました。私が grocery shopping に行ったら、お店に彼女がいたんです。わあっと思って、私、喜んでついていたら、彼女は逃げてしまいました。だから彼女はそういう性格なのよね、何か後ろに抱えているものがあるのでしょうか。私は抱えるものがあるかもしれないし、もうばあっとしています。彼女は逃げてばかり。

—ジョージ・タケイさんとは、『戦場よ永遠に』（1960年、フィル・カールソン）で共演なさっていますね。

高氏 そうそう。彼は一所懸命、いろんなことにがんばっています。

—今も、ブロードウェイなどに出ていらっやいます。マコ岩松さんは？

高氏 彼は、お亡くなりになりました。

—そうですね。共演はなさっているんですか？

高氏 はい。

—他に、アジア系の俳優さんと交流はありましたか？

高氏 ううん。ただジェームズ・繁田さんとミヨシさんはまあまあよね。

—ジェームズ・繁田さんとお付き合いがあったのですか？

高氏 一昨年、亡くなりましたが、彼との付き合いはありました。私は亡くなる前日の夜に電話でお話ししたんです。翌日、お姉さまが彼の自宅へ行くと、花瓶と共に彼が倒れていたそうです。

—ジェームズ・繁田さんはスターですごく人気がありましたよね。

高氏 彼は歌も上手でしたから。

—日本にもいらっやっています。

高氏 そうそう。そのときミヨシさんと一緒に歌ったりなさったんでしょう？ 日本の方でやっぱり受けたんでしょうね。だから彼が若い時から知っていましたよ。

——『サヨナラ』が製作された当時は1950年代後半ですよ。その時代は日本人に対する人種差別がまだ根強かったと思います。ハリウッドでお仕事なさっていて、人種差別で苦労されたご経験はありますか？

高氏 いえ、覚えてないですよ。いじめられたとかも覚えがありません。いつも、仲良くしなくちゃだめだと考えていたし、そのためには何かが足りないと思っていて。その頃は戦争の後で、本当に大変だったから。それで、先日テレビで見たのですが、日本がbombしたの、12月7日でしたか。

——パールハーバーの攻撃ですね。

高氏 日本がパールハーバーを攻撃したお話の途中で、シアトルのあるアメリカ人のおばあちゃんが大声でどなったんですよ。それを私はテレビで見えていたのですが、あれはやはり、あの戦争が傷になったのだなと感じました。そこで、私は初めて、あれはひどいことだったのだと考えました。何も知らない時にいきなり攻撃されたのでしょ。もちろん、そのことは知っていましたが、改めてそういうことがあったのだなあと感じました。彼女の話し方を見ていると、やっぱり辛かったです。あのどなった姿は忘れられない。

——高さんがジェフリー・ハンターさんと共演なさった『戦場よ永遠に』では、2人でドライブインみたいな場所で朝ご飯を食べようとすると、真珠湾攻撃のニュースが飛び込んできます。主人公のガイ（ジェフリー・ハンター）は隣の車に乗っていた男たちに「日本人なんかと一緒にいるな」と言われ、喧嘩になるシーンがありましたが、覚えていらっしゃいますか？

高氏 ありました。大昔ですね。覚えています。

——それと同じような経験をなさったのですか？

高氏 そんな経験はなかったですよ。私は若かったですし、その時は日曜日で、女性だけの同級生のクラブで集まってお友達のところに行っていました。そのニュースを聞いたのは、ちょうどお昼の時でした。ハワイがやられたと聞いてびっくりしました。お友達も、「どうしよう、帰ろうか、どうやったら帰れる？」と騒いで、その時は帰ったんです。その後間もなく、私はキャンプ（強制収容所）に入りました。私は、「自分は外人さん（アメリカ人）なんだから絶対に嫌だ」と言ったけど、ママに「そんなことはありえない。周囲は美以子を日本人だと思ってるから」と言われて、キャンプに入ったのです。

——大変なご経験でしたね。高さんは、ご自身はアメリカ人だと思っていられるのですか？

高氏 もちろん。日本人だけでも、その時々で外人さんになったりします。やっぱりアメリカ生まれですから。国籍もアメリカですしね。だから、私もアメリカ人だから、そんなことしないと言いましたが、ママは「そんなことないわよ」と。結局そういうことがありましたけどね。

——『戦場よ永遠に』でも、同じような場面（ガイと暮らす日系人家族たちがスーツケースを持ってキャンプに行く場面）を演じられますよね。当時はどういうふう感じられました？ フラッシュバックのようなものはなかったのでしょうか？

高氏 ううん、ありません。その時は、砂漠に連れていかれるからとジーパンやブーツを買ったりして支度しました。持っていくものが限られていましたが、パパはたくさん持っていきました。急に色々なことをしたけれど、私も若かったし、遊ぶことばかり考えてい



ました。キャンプには3年いたのかな。

——長いですね。『『戦場よ永遠に』で描かれている場面は、事実と同じような感じだったのですか？

高氏 それよりもっとひどかったかもしれないわね。でも、日本人は文句を言わずに、何でもはいはいってやってしまいますね。馬鹿ではなくて人がいいということです。これがアメリカ人やユダヤ人、中国人ならものすごく反対して、絶対に言われた通りにはやらないでしょう。日本人はなんでも頭を下げてはいはいって。大変でしたね。おうちもそのまま、すぐ出ていかなければならず、きちんと売る暇もなかった。誰かに安く買ったかかれて、その点で損をしましたよね。ママたちは辛かったと思います。子どもたちは、学校に行かなくてもいいとか、ボーイフレンドがどうだ、ダンスがどうだと、そんなことばかり考えていました。辛いことは辛かったですけどね。

——戦争が終わってから日系の方たちの生活は、大変だったのでしょうか？

高氏 大変だったけど、日本人はよく我慢して、何も言わずにいろんなことをコツコツとやります。今でもアメリカ全体で、偉いことをなさったたくさんの方の日系の方がいらっやいますよ。日本人は、頭がよくて我慢強い。我慢しながら一所懸命いろんなことをやっています。その我慢強さで、静かな目立たないところに住んで、どうにかして生活の目的を果たしていたんですね。偉いですよ、日本人は。でも、日本に住んでいる日本人は、あまり日系の人のことを知らないのよね。

——そうですね。

高氏 私はそれが不思議でしょうがないです。我々は、アメリカにいる日本人たちに何かあれば、本当に心配して一所懸命に手伝おうとします。日本で何かがあると、すぐお金を集めて、それを日本に送ったりしています。私も何度もお金を日本に送りましたよ。3月11日の震災の時もそうでしたし、いろんなことを支援しようと、みんなで一所懸命援助します。それなのに日本の人は、こちらの日系の人たちのことを全然考えないわ。

——そうですね。戦後の日本の復興を助けたのもやはり日系人ですよ。

高氏 そう、それです。いつも何かがあると、みんな必ず寄付して日本に送るんですよ。我々の親たちが日本、日本っていつも言っていましたし、私たちもその気持ちがわかっているからつながるんでしょうね。パパはお金がなくても、いつも小包を作って日本へ送っていました。きっと、パパは日本で何かしら約束をしてこちらに来たので、そのつながりがずっとあったんでしょうね。パパは、いつも日本のことを考えていました。パパが亡くなった時、ママは一銭も持っていなかった。保険なんかありませんでしたからね。私、日本人に生まれてよかったと思っています。日本という国は、小さな島国でありながら本当によくやっていますね。

——日本に対するそのような感覚は、移民1世、2世、3世と受け継がれているのでしょうか。

高氏 2世とおっしゃるけど、「私たち」という感覚があるだけで、3世、4世になったら日本人も何もありません。

——日本語を話さない方も多くなりますか？

高氏 日本語は話せないし、おむすびなんか全然知らないですよ。ですから、普通に外人さんです。親世代のことがわからなくなるから普通の外人さんと混ぜられて混ぜご飯み

たいになっています。だから、そういうことは考えないです。アメリカはいろんな人種が混じっていますしね。

——『戦場よ永遠に』に出ることになったきっかけはオーディションですか？

高氏 そうです。オーディションがありました。

——この作品も日本とアメリカの関係を描いた映画なので、出たいというお気持ちがあったのでしょうか？

高氏 そうです。最初からそれがきっかけで臨みましたが、そのことはあまり人に言っていません。日本に行った時、いろんなことが印象に残って何かしなくちゃと強く思いました。それが一番大事なことでした。

——『戦場よ永遠に』は、沖縄でロケをされましたが、沖縄にはいらしてないのでしょうか？

高氏 沖縄には行かなかったです。沖縄のことはテレビで見ますね。今、ロスの新聞は沖縄のことをすごく書いていますね。

——ジェフリー・ハンターさんはどんな感じの人でしたか？

高氏 この映画ではじめて彼に会いましたが、別に何も感じません。俳優さんとそんなに深く関係があるわけではないので、まあまあです。彼が私の膝を打ち付けてしまったことが印象に残っています。ここにあったんですけど、跡はなくなりました。

——フィル・カールソン監督の印象はいかがですか？

高氏 昔のことだから覚えていません。最近、ジョシュア・ローガンの娘さんといろいろ話をしています。

——娘さんも映画関係のお仕事をなさっているのですか？

高氏 いいえ。ご自分のお父さまの本を書きたいのだそうです。それで私に電話をかけてきて話をしました。彼女は今、それを一所懸命書いています。お父さまは、すごく優しい方だと言っていましたよ。私の感覚と合っていると思いました。

——『戦場よ永遠に』は、ガイ・ガバルドンさんの実話ですが、彼と面識はありましたか？

高氏 映画のことにあんまり興味がなかったからね。ごめんなさい。

——ハリウッドの映画界では、日本人、日系俳優の待遇は、白人とは違ったものだったのでしょうか？

高氏 うん。やっぱり、違っていましたね。でも、最近は黒人のことがあるでしょう？ 彼らは大きい声でどなって、テレビに出る黒人がいないって訴えだしたら、急に黒人が出てくるようになってきたんですよ。でもその中に時々東洋人が入っていて、ああ、やっぱり東洋人も文句言うかもしれないと思って、監督やプロデューサーがテレビに出したのだと思います。この頃は、みんな同じように扱わなくてはだめだと言っているでしょう？ プラス、黒人はうるさく言います。昔からそうなんです。

——では、日本人と中国系あるいは韓国系というのは、待遇が違うんですか？ それともアジア人は一緒なんですか？

高氏 やっぱり銘々で違います。韓国の人は韓国。それははっきりしています。前はそうでなかったけど、今は特にはっきりしています。

——高さんが入られた頃はいかがでしたか？

高氏 そのときはそんなになかったです。最近扱いの違いがあります。それはやっぱり黒

人が始めたんですよ。だから今では絶対に、韓国人は韓国人。日本人は日本人。中国人は中国人。それがいいか悪いかは、前にはなかったことだからわかりません。日本人もそんなにいませんでしたしね。そもそも日本人は、あまり口を出さないんですよ。それがいいか悪いかはわかりませんが、はっきりしない。日本人は、いつも頭を下げて、あまり出しゃばりません。それはやはり、日本人の性格、気質でしょう。でも、ジョージ（タケイ）、彼には後ろに誰かいるんです。彼はスターになりたいとか何かがあったんでしょうね。日本人はなんでも遠慮深くて、あまりそんなことはしませんでした。のこのこ後ろからやってきて、明日またがんばりましょうって。ファイトがないんですよ。

——最近、渡辺謙さんや真田広之さんが、がんばっていらっしゃいますね。

高氏 渡辺さんは、ご病気が治ってまたニューヨークにいらしたんでしょう？ だから彼にはいいチャンスです。彼は評判がいいです。

——早川雪洲さんとのお付き合いはありましたか？

高氏 いえ、彼はちょっと年上でしたから。彼は前から（外国の映画界に）入っているでしょう。だから彼は最初から外人さん（アメリカ人）とよくお付き合いなさったんだと思います。彼は、よくできたと思いますよ。日本人の役はあまりありませんでしたが。

——『サヨナラ』の撮影が終わり、宣伝も終わった後は、他のオファーやオーディションなどはなかったのでしょうか？

高氏 なかったのかな？ あまり興味がありませんでしたし、覚えもないですね。

——次の作品まで2年ほどは何もなさらなかったのでしょうか？ 別のことをなさったようなことは？

高氏 それも別にありません。

——話は変わりますが、1975年頃、高さんは三船敏郎さんや黒澤明さんの通訳をなさいましたね。

高氏 三船さんと私はお友達でした。アメリカに三船さんがいらしたときに何かお手伝いしてくださいと頼まれたんですよ。その時にお友達になったんです。今でも息子の史郎さんと手紙のやり取りをしています。すごく親切で、優しい方ですよ。

——三船さんもマーロン・ブランドさんみたいな優しい方でしたか？

高氏 そうそう。マーロン・ブランドと彼と生まれたのが同じくらいですよ。だから、性格的にも同じです。でも、三船さんはマーロン・ブランドに会いたくないって言っていました。

——では、黒澤明さんにお会いしたことはないのでしょうか？

高氏 ありません。

——『Walk Don't Run』（1966年、チャールズ・ウォルターズ）にも出演され、ケーリー・グラントと共演なさっていますが、何か思い出はありますか？

高氏 彼は面白い人ですよ、すごくイギリス人らしくて。彼は、私の洋服をいつも見るんです。いつもそうされるので、今日、何を着ようかと困っていました。撮影に出かける時、私の部屋から現場に行くには、彼の部屋の前を通らないといけなかったのです。それで、毎日何を着ようかと大変でした。彼が「美以子が着ている洋服を見るのは、いつも楽しい」と言うんです。こんなことを言われると、本当に困るじゃない？

——ケーリー・グラントはジェントルマンですか？

高氏 Very gentle man. Maybe too much.

——高さんは、いろいろな映画に出演なさいましたが、印象的な作品はございますか？  
あるいは、監督、共演者で印象的な方はいらっしゃいますか？

高氏 私は本当に、女優になりたいとは考えていませんでした。映画関係についてもあまり知りませんし、興味がありませんでした。映画はおとぎの国みたいです。現実じゃなくて、ドリーム、夢の国です。映画はfantasy landですよ。映画の世界には偶然入っただけですから、今日は誰に会ってとか、明日はどこに行くんだとかあまり考えなかった。その点は良かったかもしれないけれど、悪かったかもしれません。いいお友達はできましたよね。私は多分、落ち着いていたのだと思います。でも、俳優さんにはちょっとかわいそうなどところがあると思うんですよ。普通の生活とか、お友達付き合いができないですね。私は女優だからこんなことはできないとか、俳優だからあの人と付き合いはできないとか、こういうことを言うんです。頭の中でそんなことばかり考えているの、私はとても残念だと思います。みんなからちやほやされるでしょう。そういうことに慣れてしまって、仕方なしにそうなるっていくのでしょうかね。全員がそうではありませんよ。

——では、『サヨナラ』をご覧ください。これは、東京の場面だと思います。

高氏 これは大阪だと思います。

——大阪で撮られたんですね？

高氏 大阪だと思います。これはあんまりよく見えない。



——マーロン・ブランドですが、顔がよく見えませんね。

高氏 「結婚してくれ」と言った場面なの。彼の一番すてきな顔が写ってない。撮影のカメラが彼のお顔でなく、私の顔を写しています。彼のあのお顔はもう、一生忘れられない。あのお顔を見た人はみんな、惚れ惚れするはず。

——それは高さんしかご覧になっていないということですか？

高氏 そう、彼の顔を見ているのは私だけ。残念ね。本当にあのお顔を見たら、女性はみんな、ヒョロヒョロっとなってしまいますよ。

——本当にうらやましいです。今の学生もマーロン・ブランドはすてきだと、よく感想に書いています。

高氏 俳優さんたちは、自分が一番だと思っていられるから、自分がカメラに写っている時は一所懸命なさるけど、他の人が写っている時はヘチマも何もないんですよ。でも彼は、私のために一所懸命してくださったの。

——高さんのいいところをもっと引き出そうとされたのでしょうかね。

高氏 そうですね。こうやってカメラが私を写しているでしょう。その時彼は、そのカメラの横に立っているんですね。そこでおしゃべりするんですよ。だから彼は全然ここに立たないの。他の人に「おい、君やれ」とか言ってね。でも彼はいつも私のために、一所懸命やってくださって、そんないいところがあるんです。面白い人でした。この時の私、歩くと日本的になってしまうのよ、日本人になっちゃう。こんなヒョロヒョロと馬鹿な歩き方……。シャンとして撮られたら良かったのと思ったんですよ。映画女優は、映画に入ると立ち位置や向き方もいろいろ考えますよね。今、カメラに写ってないけれど、私が話していますね。相手役をちゃんと応援しなくちゃ、そんなことも考えないといけないなと思って。それであんまりやり過ぎになって、歩く段階でちょこちょこ、ちょこちょこ……。——いや、そんなふうには見えません。この撮影でお辛いことなどはありませんでしたか？

高氏 いろいろありましたよ。今の話もそうです。歩き方も変えなくてはならない。やっぱり、女優になる時はその時のことを考えなくてはけません。おっちょこちょいで、何をやっているのか、馬鹿みたい。

——ご自分が出演なさったDVDはお持ちではないのですか？

高氏 持っていませんし、欲しくもありません。

——そうなんですか？ もったいない。

高氏 全然、なんにも。もうやったことで終わりです。夢にも見ません。

——おそらく、100年後もこの映画の「高美衣子さんはきれいだね」と語り継がれると思います。東京のロケには1度も行っていらっしゃらないのですか？

高氏 東京では撮影していません。私は、京都で撮影でしたから。都ホテルに泊まっていました。

——リカルド・モンタルバンさんはどのような印象でしたか？

高氏 リカルド。あんまり仲がよくなかったです。彼は、梅木さんと時々会っていたと思います。

——『サヨナラ』の原作と映画はかなり違う部分がありますよね。例えば、原作のハナオギは、一切英語が話せないことになっています。でも、高さんが演じられることによって英語が話せる設定に変更されていますね。さらに、原作では、マーロン・ブランドが演じるグルーバー少佐とハオナギは最終的に別れますが、映画では別れることなくハッピーエンドになります。

高氏 それはブランドの注文なんです。

——マーロン・ブランドさんが仰ったのですか。

高氏 「最後に別れるのは、絶対にいけない。2人は一緒にならなくちゃだめだ」と、彼が言ったのです。

——マーロン・ブランドさんは、脚本に意見をなされたということですか？

高氏 もちろん。その頃彼はすごく売れていたし、この映画を受けてから「僕が、いろいろしなくちゃだめだ。最後は結婚しないとけない」と言ったんです。一番売れていたブランドが言うことですから、何でもOKだったんです。

——マーロン・ブランドさんと製作サイドの力関係についてお聞きしたいのですが、プロデューサーよりも俳優の力が強いという状況が、当時はありましたか？

高氏 時々ありましたよ。いろいろね。彼のやり方や考え方は普通の俳優とは違いますからね。だから、いろいろぶつかりがあったんですよね。でも、勝つのはいつも彼です。やっぱり、売れていましたから。彼のような俳優は初めてだったのでしょうか。それまで彼のような俳優はいませんでしたからね。

——プロデューサーよりも、俳優の力のほうが強かったのですね？

高氏 彼はものすごく強力だったんですよ。とにかく売れていましたからね。みんな、彼を欲しかったんですよね。だから、彼の言うとおりにしたのだと思います。

——高さんが最初にもらった台本は、初めからハッピーエンドになっていましたか？

高氏 ハッピーエンドだったかどうかは覚えていません。最初は大変だったのでね。

——最初から、マーロン・ブランドさんの要望通りの台本になっていたのか、それとも途中で変えられたのかはわからないのですね？

高氏 私、覚えていないんですよね。女優になりたいという気持ちがなく、私がもうちょっとしっかりしていたらよかったと思うだけだね。

——マーロン・ブランドさんは南部出身の軍人という役でしたので、セリフを話す時は意識的に南部なまりを取り入れたというふうに資料では書かれています。

高氏 それは、southerner と言います。考え方が違うんですよ。普通のアメリカ人だけでも、何と言うか、prejudice、排斥が多いんですね。だから、彼はそのようにしたいと言ったんです。

——それがハナオギとの出会いによって、劇的に変化していくのですね。

高氏 そうですね。彼は頭が良くて、よく動くんですよ。

——とても貴重なお話ですね。

高氏 今夜、夢を見ますよ。彼はすごく charm があったからね。彼も私のことを信用したんでしょう。いろいろと口に出さなくても。彼はよくわかったのでしょうか。私もわかったし。他の人を連れてきても全然邪魔しませんでしたから。会うこともありました。彼はいつも変な時間に電話をかけてきました。最後はこのラスベガスに私が引っ越した時です。

——ずっと連絡をとっていらっやったのですね。

高氏 彼から電話がかかってきて、話していました。「砂漠かどこかに私を連れていく」と言うのですが、私の住んでいるところを知らないんです。「僕、すぐにわかる、今にでも行くよ」と言うんです。亡くなる少し前に私に電話があったんですよ。彼は私に「僕は死なないよ、心配しなさんな」と言いました。その電話の4か月後に亡くなりました。いい人だった、変わり者だったけど。彼も人間的にいろいろあって、若い頃は苦労しています。お母様のことで寂しいこともたくさんあったんですよ。彼の最初の子どもは息子だったけど、男でなかったらよかったのに、男の子は嫌だって言っていました。だから、男の子が生まれて泣いたんですよ。

——マーロン・ブランドさんは、20世紀の俳優で、もっとも影響力のある映画俳優と言われています。

高氏 普通の俳優さんと全然違いますよ。考え方も、彼は全然違います。hyper sensitive. パーティで誰もダンスしてくれない女性のところへ行行って、やさしく話しかけるんです。そして、ダンスを申し込み、2人で踊ったのです。普通の男性は、全然そんなことしませ

ん。でも、彼のそういう優しいところは、彼の価値なんです。彼がすること、何しろすごかったです。

——映画が公開された後に、レビューをご覧になりましたか？

高氏 あまりそういうのに興味がないの。

——終わったらそれっきりなのですね。

高氏 そう。それっきり。

——でも、それが、逆によかったのでしょうかね。特にマーロン・ブランドさんには、新鮮ですてきな女性に見えたんだと思います。

高氏 彼は彼、私は私。だけど、1度だけ彼にお願いしたことがありました。私、お金が100ドルしかなくて、本当に困ったことがあったんですよ。どうしようかと思いましたが、頼れるのは彼しかいなかったんです。それで、彼に頼みに行っただけです。初めてそういうことをして、悪いことをしたなと思いました。でも彼は、「心配しなさんな。ある事務所に行きなさい」と私に言ってくれたのです。でも私、行かなかったの。ちょうどその時、私にお金が入ってきたのです。だからお金を貸してもらわなくて、「もう大丈夫」と彼にお礼を言って断りました。お金の貸し借りなどしたことがなかったから、誰とそのようなことをしたらいいのかわからなくて。そういうこともあれば、電話がかかってこない時期もあったし、かけてくれば朝の3時頃なんです。何ヶ月たっても、別に私は電話を待っている訳ではないので、あればいろいろと、長い間おしゃべりします。私たちはそういう関係でした。彼が嫌がることを私はしません。でも、彼は寂しいところがありましたね。偉くなるとそういうところもあるのでしょうかね。

——『サヨナラ』に主演なさったことは、いい思い出ですか、それともそうでもなかったのでしょうか？

高氏 そんなに私、考えないわね。それは、終わってしまうと次にやることに考えが行くんです。今はあなたたちのお話で、しゃべっていますが、他の時は、そんなに考えません。もう終わったことです。いいこともあったし、いろいろありましたけど。

——当時、ご家族は映画をご覧になりましたか？

高氏 さあ、知らないわね。パパたち、見たんじゃないかな。

——お友達から、何か言われるようなことはありましたか？

高氏 私は、あまりしゃべらないから。ただ、ごく親しいお友達には、内緒話をすることはあります。Life is too short. You have to face reality and go on. And do the best you can do. でも、『サヨナラ』の画面を見ながら] 私だけよね……生きているの。みんな亡くなったからね。ご苦労さま。これまでにいろいろあって、どうして、そんなふうになったのかわかりませんが、私にはいいご縁があるんです。私は幸せなんですよ。私の一番の仕事かな。みんなを楽しくしてあげるのが一番だと、そう思います。

——当時、この映画を見た人は、おそらくすごく慰められたというか、励みになったと思います。

高氏 そうでしょうかね。それは、ブランドのおかげですよ。「結婚は絶対にさせなくちゃだめだ」って。

——そうですね。当時、人種差別が依然としてあった中でのことでしたから。

高氏 そう。彼は、本当に偉いですよ、よく遊んでいたけど。

——彼の最初の奥さんも、マイノリティ出身の方でしたよね。

高氏 そう。彼は、いつも誰かいるし。でも最後は、誰も信用できなかったんですよね。あのときの時代のお話をして懐かしかったです。ふわふわと彼のお顔が見えますよ。彼も本当にひょこっ、ひょこっと出てくるから、面白い人でしたよ。以上です。

——今日はありがとうございました。

高氏 私は、今日の話有谁にも話をしたことはありません。こんな年でまだ話すのも、ちょっと恥ずかしいわ。

本研究は JSPS 科研費 (16K02319 研究代表者・志村三代子) の助成を受けたものである。

Received : April, 26, 2017

Accepted : June, 7, 2017